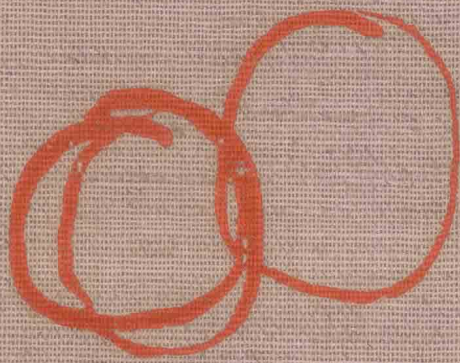




西見順全集

第十二卷

高見順全集 第十二卷

昭和四十六年二月二十五日發行

昭和四十九年二月二十日發行(二回)

著 者 高 見 順

發 行 者 井 村 壽 二

印 刷 者 山 田 博

發 行 所 勁 草 書 房

東京都文京區後樂二―二三―一五

電話東京八一四(六八六二)

振替東京一七五二五三

◎ 高 見 順 一九七四

〇三九三―八三三二―〇一八三六

* 本書の定價は外面に表示してあります。

高見順全集
第十二卷

編纂委員
川端康成
伊藤整
澁川驍
平野謙
中村眞一郎
小田切進

目次

雲の影	9
蟻地獄	23
陸封魚	33
キューピッドの退場	51
水面	69
水のう上	86
斷崖	90
竹落葉	97
夜の新緑	112
誇りと冒瀆	129

雌雄
白い猫
落ちた花瓣
裸木
文化將軍
落葉譜
暖い冬
戦後の戦場
横臥椅子
夜から朝まで
卑怯者
美しい渦

紛らはしい関係

北海の渡り鳥

氣に入らない魅力

プラトニック・ラブ

風景

大變な娘

山の手の子

片耳のたれた兎

女たらし

むごたらしい人生

楽しい人物

花のやうな葉と葉のやうな花

屠 殺

眞晝の幽霊

不正確な生

麻 藥

七 首

尻 の 穴

枯れすすき

不 遇

解説 吉行淳之介
解題

短篇小說五

雲の影

一

家族四人が、切り炬燵きりこんの四方にそれぞれ、をさまつて、

「おめでたうございます」

先づ妻の榮子が、改まつた聲で言つた。

「おめでたう……」

床の間を背にした良人の諸井もろいが受けると、つづいて、その正面から娘の澄子が、

「おめでたうございます」

それに唱和するやうに、息子の良一が左側から、

「おめでたうございます」と言つた。

良一のうしろの障子に、硝子戸越しの朝日が暖く射してゐる。ここは箱根の旅館である。その一室で、この家族は元旦

を迎へたのである。

「では、お屠蘇とそを、お祝ひませう」

妻の榮子が切り炬燵の上に、手をのばした。そこには、女中が運んできたお屠蘇の道具が既に置いてある。

榮子は、朱塗りの盃を諸井にすすめて、

「はい」

とろりとしたお屠蘇をついだ。諸井は無言のまま、一口やつて、

「うむ」と、顔をしかめた。

「なにか……?」

お屠蘇が變なのかと、榮子は盃のなかを覗くやうにした。

「いや……」

諸井は、甘つたるいお屠蘇を傾けて、

「なんでもない」

と言つたが、その心中は、

(加島さへ、へましなかつたら……)

と、頗るいまましいのだつた。加島とは、諸井の友人である。悪友と言ふべきか。

悪友同士語らつて、實は、この正月は、それぞれ自分の女を連れて、ここへ来ようときめてゐたのである。それが、加島のへまで蹉す踏した。

「では、良一」

と、榮子は盃を息子の良一に廻して、

「はい……」

良一に、お屠蘇の入った銀器を向けると、

「お母さん。さきに……」

と、良一は盃を母の前に置いた。

「お母さんは、あとで頂きます」

「僕があとで頂く」

「いいえ、良一の方がさきに……」

母子の互譲を、諸井は、

（ちよつと、いいな。）

と見る。家での惰性的な正月と違つて、旅館だと、ちよつと改まつて、

（いいもんだ。）

と思ふ。加島のヘマで、かねての計畫が蹉跎して、家族連れで、ここへ來ることになつたのだが、これもよかつたと思ふ。思ふと、しかし、諸井は、そんな自分にいまいささか感じられて、

「どつちが先だつて、いいぢやないか」

榮子はびつくりしたやうな眼を諸井に向けた。

「お母さん、先に頂きなさい。良一が折角、さう言ふんだから」

と、諸井は言つた。お屠蘇は、本來は年少者から始めて年

長者へと廻すものだが、この家ではいつも逆になつてゐた。

「では……」

榮子は從順に、盃を取つたが、誰もお屠蘇のつぎ手が無い。

（あ、さうか。）

と諸井は銀器を取つた。

ほんとなら、この、宿のどてらで着ぶくれた榮子の代りに、諸井の若い愛人がゐる筈なのだつた。

榮子がお屠蘇を祝ふと、次は良一だつた。良一は大學生である。ほんとなら、この良一の代りに、加島が坐つてゐる筈だ。

良一の次が、中學生の澄子である。澄子の今ゐるところに、加島の女が坐つてゐる筈だつた。

「お雑煮、まだかなア」と良一が言つた。

「お雑煮がすんだら、兄さん、ピンポンしませうね」

その澄子のあとから、榮子が諸井に、

「お雑煮がすんだら、すぐ、ゴルフですか？」

「うーん」

と、諸井は生返事をして、そして強く、

「うん、さうだ」

加島と二人で、ここへゴルフに來るといふ理由で、正月の家をあけることにしてあつたのだ。この宿にも豫約しておいたのだが、加島が來れなくなつて、かういふことになつた。

諸井は榮子に、

「加島の奴、用があつて、駄目になつた。宿に今から破約も氣の毒だから、良一や澄子も連れて、みんなで行かう」

さう言つたのである。蹉跌の原因は言はなかつた。

「パパがゴルフにいらしたら、ママもピンポンしない？」

「ピンポン？ 息が切れて駄目でせうね」

榮子は心もとなさうに、澄子に言つた。

「大丈夫よ。息が切れない程度にやりませうよ」

「やつてみませうかね」

諸井の心に翳がさした。榮子が、哀れに感じられた。從順なこの妻を、だましつづけてきた自分だ。——諸井は、首を振つて、

「ちよつと、そこ、あけてごらんよ」

良一に言つた。

「障子をあけて、外の景色を見ようぢやないか。陽が當つてゐるから、寒くはないだらう」

うつたうしい心の窓も、あけたいのだつた。

諸井と同じどてらを着た良一は炬燵から立つて、障子を明け放つた。爽やかな朝の光が、硝子戸越しに、さつと部屋に流れた。廣い庭の、綺麗に刈り込んだ芝生は黄色く枯れてゐるが、朝の光を浴びて、その枯草の色は、美しかつた。かなたにゴルフ場が眺められ、その上に乙女峠と長尾峠をつなぐ

山の尾根が、青空にくつきりと聳えてゐる。

「いい天氣だ」

「いいお正月ですね」と、榮子は言つた。

「この宿屋さんに、バドミントンないかしら？」

これは澄子で、

「こんないいお天氣では、ピンポンより、外でバドミントンをした方がいいわ」

「羽子板なら、あるだらう」

諸井が言ふと、

「澄子の羽根つきの相手は、ごめんだな」

良一が毒づいた。

「下手で、負けるもんだから……」

と、澄子がやりかへした。榮子は、そんな兄妹に、にこにこ顔を向けながら、

「ゴルフには、もつてこいのお天氣ですね」

と、諸井に言つた。諸井のために、お天氣を喜ぶ聲で、

「雨だつたりしたら、折角お楽しみゴルフができないと、わたくし、ひやひやしてましたけど、ほんとによかつた」

「うむ」

妻の善意が、諸井には苦手だつた。外に眼をやりながら、諸井は言つた。

「大分、もぐらが、いたづらしてゐる」

「もぐら？」

榮子が言ふのと同時に、

「もぐらがある？」

と、良一が上體を硝子戸の方にねち向けて、

「どこに？ お父うさん」

「ほら……」

芝生に點々と、黒い土が盛りあげられてゐるのに、諸井は指を向けて、

「あの下に、もぐらがあるんだ」

「なーんだ。僕はまた、もぐらが地面から匍ひ出して、何かしてゐるのかと思つた」

「こんな日中に飛び出したら、もぐらは死んでしまふ」

「それは僕も知つてるよ。だからさ、變だと思つて。お父うさんつたら、もぐらが、いたづらしてゐるなんて言ふから……」

良一は、子供っぽく言つた。諸井は笑つて、

「もぐらにしたら、芝生にああやつて、下から土を盛りあげるの、何も、いたづらぢやないんだらうが、あれは、芝生を荒されて困るんだ。ゴルフ場の連中は、あれを、もぐらのいたづらと言つて——また、いたづらをしやがつたと、もぐら退治をやる」

「もぐら退治？」

「面白いもんだよ」

女中が膳を運んできたが、諸井は言葉をつづけた。

「もぐらの奴が、地面の下を歩くと、芝生が、もくもくつと動くんだ。そのもくもくも、見てゐて面白いもんだが、もくもくつと、一直線に、かう、動くのを見定めて……」

諸井は、手を動かして、説明の助けをしなから、

「そのもくもくつと動く先に、シャベルを、ぐさつと突き込むのだ。もぐらの進んで行く前に、シャベルでもつて、通せん坊をする譯だね。さうしておいて、地を掘り返すと、もぐらが、ころつと出てくる」

「ふーん」

「もぐらの奴は、あと戻りが、きかないんだらうね。シャベルで通せん坊をされると、そのまま動きがとれなくなる」

「前進しか知らないで、退却は知らないといふ譯か」

良一は、大學生らしい語調で、

「一步退却二步前進は、もぐらの世界にはない譯だな」

「なんだい、それは」

「馬鹿なもんですね」

「とにかく、地面のもくもくさへ見つければ、すぐ、もぐらはつかまへられるんだ。進退谷まつてゐるところを、掘り返すんだから、雑作もなく、退治できる」

「——可哀さうに」

と、榮子が呟いた。低い聲だったが、それは妙に鋭く諸井の胸に響いた。

「では、お雑煮を食べよう」

元氣よく言つたつもりだったが、その諸井の聲も低かつた。

二

お雑煮がすむと、

「さ、ピンポン」

と、澄子が立つて、着替へをはじめた。どてらでは、敏捷に動けない。戦闘準備をしながら、

「さ、お兄さん」

良一も洋服にしろと促したが、良一は、澄子をひねるくらゐは、どてらでもやれると言つた。

仲良しの故の口喧嘩をしながら、二人は部屋を出て行つた。

「ぢや、お着替へをなさいますか？」

榮子が言つた。ゴルフは、ピンポンとは譯がちがつて、どてらのままではやれない。

「うーん」

諸井は、炬燵の蒲團を、腰の上に引つ張りながら、

「熱いお茶を一杯、貰はうか」

「はい」

まめまめしく榮子は立つて、鐵瓶のたぎつてゐる火鉢の前に行つた。急須の蓋が、かちりと盆に置かれた。

「實はね、榮子」

「は？」

「加島と一緒に、ここへゴルフに来るつもりだったのに、加島が來れなくなつた譯といふのはね」

諸井は、何故、こんなことを自分から言ひ出したのか、自分でも分らない。

「加島の奴に、女ができて、それが加島の細君にばれたんだよ」

「あの加島さんが、そんな……」

不品行なことを……と榮子は、驚いた顔だった。

「さうなんだよ。人は見かけによらないもんだ」

と、諸井は相組を打つて、

（俺の場合は、どうなんだらう。）

やはり、見かけによらないといふ方か、それとも、見かけ通りと言はれるだらうか。

（いや、そんなことより……）

諸井は口の中で言つた。榮子は、自分の良人にも、女があるといふことを、少しも知らないし、疑つても見ないと、諸井は満足の顔をして、

「加島の奴は、恐らく初めて女を作つたのに、忽ち女房にカ

ンづかれるなんて……」

阿呆な奴だ——あやふく言ひかけて、

「初めてだから、却つて、さういふことになつたのかな」

餘計まづいことを言つてしまつた。諸井は、しかし、しま

つた！とは思はない。相手の榮子が、

「それでは、まるで、あなたの場合は、しよつちゆうのことだから、ばれないと言つてゐるみたいですね」

と、からんでくるやうな女ではないと、たかをくくつてゐたからである。そして、その通りだつた。急須と茶碗をのせた盆を持つて、榮子は元の座に戻つて、

「加島さんの女の方つて、どういふ方なんです。やはり、花柳界の……？」

「やはり？」

諸井の今の女は、花柳界の女ではなかつたが、前には、藝者を圍つたことがある。それで、つい榮子の「やはり」に、こたはつたが、

「藝者さんぢやないんですか？」

と、榮子は、翳の無い聲で言つた。

「玄人ぢやなくて、素人なんだ」

諸井は茶碗を取つて、口に近づけた。

「素人の方ですか？」

素人といふと、どういふ……さうした詮索はしないで、榮

子は、

「素人は、いけませんね」と言つた。

諸井は、口に近づけた茶碗を離して、

「素人は、いけない？」

あうむ返しに言つて、

「どうして？」

諸井の今の女も、素人だつた。

「いけませんわ。氣の毒ですわ」

榮子は、ちらと諸井を見た。ちらとだつたが、諸井と視線が合つた。諸井は、熱い茶を、フーフーと吹きながら、飲んだ。

「あの赤い實は、遠くからだ、花のやうですね」

榮子は何かバツが悪さうに、庭に眼をやつた。

「赤い實？」

諸井も庭に眼を向けた。バツが悪いのは、この諸井の方だつた。

「あれは、アセビだ」

「アセミ？」

「アセミぢやなくて、アセビ」

そのつやつやした葉には猛毒があつて、馬がその葉を食ふと昏酔するといふところから、このアセビは馬酔木と書く。馬酔木は箱根に多かつたが、常緑樹なので特に庭に植ゑてある。